

農と暮らしの新たな視点を探る

産直コペル

sanchoku coper

2015.1
vol.9

被災地の直売所1

御嶽山噴火から2ヶ月
ふもとで働く人々を訪ねた

しまんと地栗
栗の木10,000本プロジェクト

四万十ドラマ 代表取締役 畦地履正 (高知県)

書籍紹介

長野県人が拓いたブラジル・日本村

刊行『一粒の米死なずば』～レジストロ地方入植百年

寄稿 ニッケイ新聞編集長 深沢正雪



ブラジル移民といえば、第1回移民船「笠戸丸」（1908年）やそれを運行した水野龍ばかりが取り上げられる傾向がある。しかし、わずか4年後の1912年3月、東京シンジケートの青柳郁太郎代表はサンパウロ州政府とレジストロ地方における5万ヘクタールの土地無償譲渡を含む植民地設立契約を結んだ。日本人最初の集団地だ。

北米の日系人は大戦中に強制収容された影響もあって、日本的なものを嫌い「アメリカ人」になろうとする傾向があるといわれる。ところが、ブラジル日系社会は今も誇りをもって日本文化を保持している。北米との大きな違いは、日本人集団地を形成したことだ。単身の農業移住者ばかりでは、現地女性と結婚し、その子どもの代から現地化するのは必至だ。両親が日本人、周り近所が日本人ばかりという海外において類まれな移住地環境の中で育まれた子孫だから、日本語を多少なりとも使え、日本文化を保持した。その最初の集団地が、まさにレジストロ地方にあった。

最初の集団地「桂植民地」に先頭を切って開拓に入っていたのは文句なしに長野県人だった。例えば、そこで生まれた柳沢嘉嗣ジョアキンさん（90、二世）の父・喜四郎は北佐久郡出身で、1918年9月に渡った草分けだ。サトウキビ栽培を手がけ、それを原料にした蒸留酒「ピング」製造へ手を広げた。

また、安曇野生まれの輪湖俊午郎（1880—1965）はブラジル移民史に特筆すべき、初期の邦字紙編集長を歴任したインテリ移民だ。彼が長野県を遊説して回って移住を呼びかけ、

レジストロ第4区は“信濃村、と呼ばれるほど信州人が集中した。

その様子をみた日本力行会の永田稠第2代会長（諏訪郡出身）が「ブラジルは最適の地なり」と確信し、信濃海外協会設立に加わり、レジストロから輪湖や北原地仙造（更級郡出身）を引き抜いて、1924年に第1アリアンサ移住地を建設し、こちらは今年90周年を祝った。力行会は戦前戦後合わせて1220人もブラジルに送り込んだ。

レジストロでは当初狙った米作はうまくいかず、入植者は生活苦に陥った。そんな中、岡本寅蔵は1934年、インドのセイロン島にあるリプトン工場から紅茶の種をこっそり持ち出し、戦後「紅茶の都」として生まれ変わった。“コーヒー王国、に日本人が「紅茶の都」を作った。ただし為替の変動と共に国際競争力が衰えてしまった。ブラジルの小さな町に、明治の日本人が始めた大きな物語が眠っている。『一粒の米死なずば』では、そんなブラジルの海岸部にある小さな町に眠っている、明治の日本人が始めた大きな物語を可能な限り発掘した。

ニッケイ新聞社歴

終戦直後の勝ち負け抗争時に、「正しい情報を伝えなくては事態は収束しない」との思いに燃えた有志が集まり、1947年1月に創立されたのがパウリスタ新聞。そこから1949年1月に分かれたのが日伯毎日新聞。一世高齢化と80年代半ばからのデカセギ現象によって読者は減り、1998年3月に両紙は合併し「ニッケイ新聞」（高木ラウル社長）に。本社はブラジル国サンパウロ市。週5回の日本語新聞で平均約8ページ。発行部数は約1万部。



初期の開拓の様子
（『イグアçu植民地創立二十周年記念写真集』より）



今ではブラジルの一地方レジストロの“伝統行事”
となった灯ろう流しの様子



桂植民地で生まれ育った柳沢嘉嗣
ジョアキンさん



レジストロ第1植民団の一人、松村
栄治（1894—1988、北安曇野郡出身）
の息子の昌和さん